



I N T E R V I E W
インタビュー

外部評価 を終えて

～その成果と今後の課題

平成12年1月28日に、学外の有識者24名を招いて滋賀医科大学外部評価が実施された。

井村裕夫外部評価委員長（科学技術会議議員、神戸中央市民病院院長）はじめ多数の評価委員が出席して、大学運営・財政・改革についての全体会議が行われた後、「教育活動」「研究活動」「診療活動」「社会との連携活動」「看護学科」の5つの分科会に分かれて評価が行われた。

外部評価の実施に当たって、資料の作成などの準備に取り組んだ点検評価委員会の委員長、内科学第三講座の吉川隆一教授に、今回の外部評価の目的や成果、今後の課題についてお話をうかがった。



吉川 隆一 教授（内科学第三講座）

まず、外部評価を実施された目的についてお聞かせいただけますか。

滋賀医科大学は1974年の開学から四半世紀が過ぎましたが、その間、幅広い教養と知識を備え、科学的探究心に富んだ医師や研究者を育てるといふ趣旨で活動してきました。また、時代と共に社会的な環境や学生の気質もずいぶん変化してきました。

本学では、大学のシステムが時代に合っているか、うまく機能しているかといったことを定期的にチェックして、改善すべき点は改めてきました。しかし、これはすべて学内で行った、自己点検・自己評価と、それに基づく改革であって、内部の人間が行うということにとどまっていた。

本学が本来の目的に合った活動をしているかどうかという評価は、内部の人間だけでなく、外部からの第三者的な評価が必要だという声が高まり、こうした新しい社会の動きを受けて、今回初めての試みとして外部評価を受け、教育、研究、診療等の諸活動について評価を求め、将来計画などの参考に資することにしました。

外部評価が必要だという議論はかなり以前からあったのですか。

実は、国レベルの議論はずいぶん以前からなされていて、平成12年度には大学評価のための特別な機構「大学評価学位授与機構」が作られ、すべての国立大学が法律に基づいて評価を受けるということが、全国的な動きとして出てきました。

これまでに本学を含めて10校ほどが自主的に外部評価を受けていますが、今後は外部評価が義務づけられることとなります。

総合的な評価について、どのように受けとめられましたか。

全体としては一定の評価を受けたと考えています。特に、新しい時代に対応できるように、大学全体が改



視察風景



全体会議

革に取り組んでいるという姿勢が評価されて、お誉めのことばをいただきましたが、各論的には評価いただいた点と、かなり厳しい指摘をいただいた点があります。

いずれにしても今後本学が進むべき方向性について、多くの示唆を与えていただけたと思います。

特に高く評価されたのは、どのような点ですか。

まず、入学試験制度の改革への取り組みについて、県内の高校生を重視した「地域指定特別選抜」や他学部卒業者を対象とした秋入学の「学士入学制度」など、多様な学生を入学させるための全国で初めての試みに対して、たいへん高い評価をいただきました。

また、定員30名に対して毎年40名を超える学生が大学院への入学を希望しているという点が、単科大学では数少ないケースであるということで、大学院の充実ということが非常に評価されました。

さらに大学運営については学長の指導力を十分に発揮できるシステムを整えて、事務サイドにも「研究協力係」や「大学改革推進係」を設置するなど、大学改革への積極的な取り組みを行っている点が評価されました。

附属病院については、IVMR（治療支援MRシステム）の全国第1号機が導入されたことが先進医療面で高く評価されたほか、選択メニューの実施など患者サービスの向上や病診連携への取り組みに成果が感じられるというコメントをいただきました。

逆に改善すべき課題として指摘されたのはどのような点ですか。

まず、研究面では全体としての



平均的な活動については全国レベルに達しているものの、全国で1、2を争う、あるいは国際的に通用するトップレベルの活動が少ないという指摘を受けました。先端的な研究が生まれるよう、制度改革を図り、研究者を育てるような環境づくりが求められていると思います。

2番目に財政ですが、大学全体としての歳入歳出の収支バランスが必ずしも好ましくないということでした。これを改善するためには、大型の研究費の獲得、外部資金の導入に

向けての運営上の改善・努力が必要になります。

附属病院についても収支のバランスについての課題が指摘され、特定機能病院としての特性を發揮するため診療機能のさらなる向上を期待するという意見をいただきました。さらに、IVMRについては評価をいただきましたが、全体的にもっと先進的な医療を取り入れるべきだという指摘がありました。

そういった結果を受けて、今後の取り組みについてどのように考えておられますか。

夏前に受け取った報告書を基に、改善すべき課題については、大学の執行部でひとつひとつを取り上げて、大学全体として議論しながら、可能なものから改革に取り組んでいきたいと考えています。

また、この年末（平成12年）に実施される「滋賀医大フォーラム」という全学集会で、大学の構成員の意見を聞いて、改革への足掛かりにしたいと思っています。具体的にそれぞれの課題に関してどうするかというところまでは至っておりませんが、やはり、今年度内にある程度の改革案を策定すべきではないかと考えています。



今後、同様の外部評価を受けられるご予定はありますか。

大学評価学位授与機構による評価システムができましたので、今後自主的に行うことはないと思います。当面は法律に基づいて第三者機関による評価が毎年実施される予定です。

ただ、今回の外部評価には全国からたいへんご高名な先生方に参加していただきましたが、すべて大学の関係者の方々です。これは、滋賀医科大学からみれば外部といえますが、大学ということでは同じ専門家による評価「ピア・レビュー」であり、ある意味では内部評価であ



講評

講評



るともいえます。

第一段階としては、今回の外部評価は非常に意義ある取り組みであったといえますが、やはりこの次は大学の外の人たちの評価が必要です。今現在、一般社会が本学の活動、現状をどのように評価しているかは、必ずしも明らかではありません。大学の外の人たちがどう思っているか、一般社会からの評価が次の段階として非常に大切になってきます。従って、今後は社会、特に地域の人たちがどう思っているか、どう評価しているかを受け入れるシステムを作っていくことが必要だと思います。社会あつての大学ですので、その点にもっとも関心をもっておりま

か。 具体的にになにか動きはあるのです

小さな動きですが、入院患者さんを対象に、「ドクター・オブ・ザ・イヤヤー」という制度が昨年からスタートしました。アンケート形式で患者さんに主治医の評価をしていただいて、患者さんの生の声を聞くという試みです。

もう一つ、これは現在検討中ですが、臨床研究活動の倫理性を検討する倫理委員会が学内にあるのですが、その倫理委員会のメンバーに市民の代表の方に1人入っていたらということを考えています。

このように、断片的には社会から大学を評価していただくということをやっておりますが、できれば全体として市民の視点で評価できるようにシステムづくりに取り組んでいきたいと考えています。

今回の評価を終えられてのご感想を聞かせていただけますか。

大学の活動というのは非常に多面性をもっていきまして、大学全体としてたいへんな仕事をしていると思います。外部評価のための資料をまとめる作業を通して、ほんとうにたいへんな役割を担っているなと思ったのが正直な感想です。そしてこの資料をまとめるために、われわれ点検評価委員だけでなく、大学全体のス

タッフが膨大な時間を割いて、がんばってくれたことに感謝しています。

これだけの努力をして外部評価を実施しましたので、この努力を単に大学関係者だけにしか評価していただけないというのは、ちょっと物足りない気がします。大学はこれだけのことをやっているという活動の現状を、県民のみなさんにも知っていただけるよう、広く社会に対して発信できればと思っています。

収録：平成12年11月17日

